

## 各分野の研究報告書

## 研究の進捗状況について

0歳台、1歳台から活動に参加した子どもたちは、愛着形成を含む心理発達、手話言語獲得において、順調な道筋を歩んでいる。重度聴覚障害児に関しては、1歳～2歳で人工内耳を装用するケースがほとんどであるが、手話言語獲得は聴覚を活用した日本語習得にも効果を与えている傾向が強く観察されている。

2025年度は、各分野において引き続き検査の実施と、結果の分析を進め、その研究成果を国内外の学会にて発表を行うとともに、その内容を行政や関係機関等に提言していく。

以下、各分野の成果と課題について述べる。研究概要・実施数については P5 から参照。

## 1. 心理発達(人格形成)

報告者: 河崎佳子

自己評価基準 A: 目標達成 B: ほぼ目標達成 C: 目標に至らない部分があった D: 目標に至らず

今年度(2024年度)の目標	自己評価	成果と課題(自己評価の理由)	次年度(2025年度)の目標
こめっこ・べびこめ・もあこめ活動時における観察と保護者への聞き取り (28名以上に実施)	A	べびこめ参加の未園児(0～3歳)27名、こめっこ参加の就園児(4歳～6歳)18名、もあこめ参加の就学児(7歳以上)12名について、観察と保護者からの聞き取りによるデータ収集を行った。得られたデータは、対象児別に経過が辿れるフォームで記録している。	・引き続き、未園児、就園児、就学児合わせて28名以上のデータ収集を行う。
「津守・稲毛式乳幼児精神発達診断」他 (未就学児の28名に実施)	A	手話言語の発達、手話による理解やコミュニケーションについても回答できるように修正した内容で、実施。未就学児45名に、延べ54回実施した(3歳までは半年に1回実施、4歳以降は年に1回実施)。加えて、2022年度より新版K式発達検査を実施し、2024年度は25名に実施した。	・引き続き、未園児、就園児合わせて28名以上に実施予定。
「S-M 社会生活能力調査」 (就学児8名以上に実施)	A	手話言語の発達、手話による理解やコミュニケーションについても回答できるように修正した内容で、実施。就学児12名について実施した(年に1回実施)。	・引き続き、就学児8名以上に実施予定。
2024年度から実施する、自尊感情、孤独感、アイデンティテ	B	2023年8月に初回実施した、幼児期前期からこめっこに通い、手話を獲得・習得して育つ小学生を対象とした「もあこめ手話合宿」を、今年度も2024年8月に実施した。その活動において、ろうスタッフと	2025年度から自尊感情測定尺度(東京都版)を小学生(7歳以上)対象に実施予定。2024年度のパイ

イ形成等の検査について、ひきつづき検討と準備作業を行う。		の一对一での対話や、グループワーク、ディスカッション等の取り組みを行い、その様子と内容をデータとして、対象児の心理発達を測るのに適した検査について検討し、自尊感情測定尺度（東京都版）を選定。小学6年生（12歳）4名を対象にパイロットテストを実施した。また、その対象児4名の保護者にも、親役割満足度尺度を実施した。	ロットテストをもとに、対象児や実施時期について検討する。 保護者を対象とした 親役割満足度尺度の実施を検討していく。
------------------------------	--	--	--

## 2. 言語獲得

報告者：武居渡

自己評価基準 A:目標達成 B:ほぼ目標達成 C:目標に至らない部分があった D:目標に至らず

今年度(2024年度)の目標	自己評価	成果と課題(自己評価の理由)	次年度(2025年度)の目標
「日本手話文法理解テスト」 (15名に実施)	A	就園児(4歳～6歳)7名、就学児(7歳以上)8名に実施した(年1回の実施)。前年度に42点以上取った被検児については実施していない。次年度も引き続き、検査を実施し、これまでの結果を含めた発達的な変化等を分析していく。	・就園児、就学児合わせて15名に実施予定(2024年度時点で、点数の基準を超えた対象児は実施しない方向) ・これまでの結果を含めた発達的な変化等を分析していく。
「質問—応答関係検査」 (15名に実施)	B	就園児(4歳～6歳)3名、就学児(7歳以上)5名に実施した(年1回の実施)。前年度に200点以上取った被検児については実施していない。次年度も引き続き、検査を実施し、これまでの結果を含めた発達的な変化等を分析していく。	・就園児、就学児合わせて15名に実施予定(2024年度時点で、点数の基準を超えた対象児は実施しない方向) ・これまでの結果を含めた発達的な変化等を分析していく。
「手話版語彙流暢性検査」 (8名に実施)	B	昨年度までの検査結果の分析に時間を要し、メソッドの構築まで至らず、実施したことがない就学児(7歳以上)1名のみの実施となった。次年度は、これまでの検査結果も含めて実施した映像や語彙の記録を分析し、対象年齢や判定方法などメソッドの構築を進めていく。また、未実施の対象児にも実施していく。	・就園児、就学児合わせて8名以上に実施予定 ・メソッドの構築を進め、結果を分析していく。
絵画語彙発達検査 (8名に実施)	A	就園児(4歳～6歳)3名、就学児(7歳以上)5名に実施した(年1回の実施)。被検児の能力に合わせて、音声、対応手話、文字を用いての検査方法で実施している。次年度も引き続き、検査を実施し、これまでの結果を含めた発達的な変化等を分析していく。	・就園児、就学児合わせて8名以上に実施予定 ・これまでの結果を含めた発達的な変化等を分析していく。

J-cross 日本語文法理解テスト (8 名に実施)	A	就園児(4 歳～6 歳)3 名、就学児(7 歳以上)5 名に実施した(年 1 回の実施)。被検児の能力に合わせて、音声、対应手話、文字を用いての検査方法で実施している。次年度も引き続き、検査を実施し、これまでの結果を含めた発達的な変化等を分析していく。	・就園児、就学児合わせて 8 名以上に実施予定 ・これまでの結果を含めた発達的な変化等を分析していく。
--------------------------------	---	--	--

## 3. 学習能力

報告者：酒井邦嘉 河崎佳子 武居渡

自己評価基準 A：目標達成 B：ほぼ目標達成 C：目標に至らない部分があった D：目標に至らず

今年度(2024 年度)の目標	自己評価	成果と課題(自己評価の理由)	次年度(2025 年度)の目標
学習能力(理解力) 「手話モノログ動画」の実施 (8 名以上に実施)	A	就園児(4 歳～6 歳)3 名、就学児(7 歳以上)7 名に実施した。引き続き、活動参加の年中(5 歳)～小学 5 年生(11 歳)を対象に検査を実施して、手法の確立、評価方法など、メソッドの構築を進め、結果を分析していく。	・就園児、就学児合わせて 8 名以上に実施予定 ・メソッド構築と、結果を分析していく。
学習能力(理解力) 手話劇版「心の理論課題検査」(動画)の実施 (8 名以上に実施)	A	パイロットテスト対象児を除いて、就園児(4 歳～6 歳)3 名、就学児(7 歳以上)6 名に実施した。引き続き、活動参加の年中(5 歳)～小学 5 年生(11 歳)を対象に検査を実施して、手法の確立、評価方法など、メソッドの構築を進め、結果を分析していく。	・就園児、就学児合わせて 8 名以上に実施予定 ・メソッド構築と、結果を分析していく。
学習能力(思考力)の問題 作成と実施	A	認知過程と思考に紐づく問題を作成し、部分と全体問題(全 9 問)視点変化の問題(全 9 問)数量理解(全 9 問)拡張類推問題(全 9 問)時系列問題(全 9 問)の項目に分類した。これらの検査問題を大人で実施し、脳科学領域の解析と組み合わせることで、手話の言語処理との関連が明らかとなった。今後は子どもの参加者数を増やして、研究の総括に向けた分析を行いたい。	・就園児、就学児合わせて 8 名以上に実施予定

## 4. 脳科学分野

自己評価基準 A：目標達成 B：ほぼ目標達成 C：目標に至らない部分があった D：目標に至らず

今年度(2024 年度)の目標	自己評価	成果と課題（自己評価の理由）	次年度(2025 年度)の目標
<ul style="list-style-type: none"> <li>・収集した脳活動データの解析と手話理解と思考力に関する分析</li> <li>・他の領域との連携により脳科学領域からの研究結果をまとめる</li> </ul>	A	MRI による調査結果をもとにした解析結果について、失語症学会にてポスター発表を行い、論文化を進めた。現在、提出論文が査読中であり、共著者の一人（日野）の博士学位論文として、さらに執筆を進めている。手話読み取り時の脳活動の解析と、思考問題の各項目を解く時の脳活動に共通点を見出した。この解析結果をもとに他の分野の研究との協働を整理することが可能となり、今後に向けて、今後に向けて、活動参加の就園児、就学児への思考力に関する追検査へ発展させ、研究結果をまとめる成果を得た。	論文発表の実施。解析結果とこめっこの子どもたちに向けた思考力検査について、脳科学検査との結果を整理の上、各研究との横断的分析を実施する。

## 1. 心理発達分野

### 研究概要：

こめっこが支援する子どもたちの心理発達を、情緒、認知、コミュニケーションなど複数のラインから捉える縦断的研究を、観察、インタビュー、検査によって行っている。

日本手話での実施を検討した上で、「津守・稲毛式乳幼児精神発達診断」（3歳までは半年に1回、以降は年1回）と「S-M 社会生活能力検査」（小学生以上を対象に年1回）、「K式発達検査」（概ね2歳以上を対象に年1回）を行っている。

昨年度から検討を重ねてきた小学生高学年を対象とした性格検査等について、自尊感情測定尺度（東京都版）を選定し、小学6年生（12歳）4名を対象にパイロットテストを実施した。

※「心の理論」課題の日本手話劇版について、手話での内容理解に繋がること、学習能力分野と協力して検討を重ねていくのが望ましいと考えられることから、今後は学習能力（理解力）分野にて報告する。

### 現在の進捗状況：

#### ○津守・稲毛式精神発達検査

・実人数 （2024年度目標数 28名以上） 2025年3月31日時点

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	合計
2024年度	4	7	11	6	5	5	9	0	0	47
2023年度	4	8	4	6	12	7	7	0	0	48
2022年度	3	6	7	8	9	5	2	0	0	40
2021年度	0	6	11	11	7	2	4	1	0	42
2020年度	3	9	13	7	1	5	2	0	1	41

#### ・2024年度における月毎の延べ人数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
0歳	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	4
1歳	0	0	2	0	3	0	1	3	1	0	0	0	10
2歳	2	1	0	2	0	2	1	2	1	2	0	1	14
3歳	0	0	2	1	0	1	2	1	1	0	1	0	9
4歳	0	0	0	1	0	2	0	0	0	1	0	1	5
5歳	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	2	5
6歳	0	1	1	2	1	0	0	0	0	0	1	3	9
計	2	2	8	6	4	5	4	6	3	6	3	7	56

2024年度  
計 56名

## ○S-M 社会生活能力検査（小学生以上対象）

・実人数（2024 年度目標数 8 名） 2025 年 3 月 31 日時点

	7 歳	8 歳	9 歳	10 歳	11 歳	12 歳	13 歳	合計
2024 年度	5	0	0	1	1	5	0	12
2023 年度	0	0	2	1	6	0	0	9
2022 年度	3	2	2	5	0	0	1	13
2021 年度	2	2	6	0	0	1	0	11
2020 年度	3	7	0	0	0	0	0	10

## ○「新版 K 式発達検査」（概ね 2 歳以上を対象に年 1 回）

	2 歳	3 歳	4 歳	5 歳	6 歳	7 歳	合計
2024 年度	2	3	3	7	6	4	25
2023 年度	0	2	9	6	5	0	22
2022 年度	0	7	6	5	1	3	22

## ○自尊感情測定尺度（東京都版）

小学 6 年生（12 歳） 4 名に実施

※2025 年度からは小学生（7 歳以上）に実施することを目標とし、対象児や実施時期について検討する。

## ○保護者への聞き取り

津守・稲毛式精神発達検査、S-M 社会生活能力検査と共に、検査実施時に保護者から最近の対象児の変化や成長の様子について報告を受けたり、現在の保護者の不安や気がかりなこと等を聞き取ったりし、対象児とその家族の状況の把握に努めている。昨年度から継続して検査を実施している対象児については、前回の結果との比較検証を行い、今後も継続して個人内変化を見ていく予定。

## ○小学 6 年生（12 歳）の保護者へのインタビューと親役割満足度尺度実施

幼児期前期からこめっこに通い、手話を獲得・習得して育つ小学 6 年生（12 歳）の保護者を対象に、8 年間のこめっこ参加体験を振り返り、対象児の様子や保護者の思いを聞き取るインタビューを実施した。また、保護者に対して親役割満足度尺度を実施し、結果の分析を行った。今後も保護者に対する聞き取りおよび調査を継続し、データを蓄積していく予定。

## ○活動中の観察と記録

活動時の対象児の様子や保護者からの報告をスタッフで共有する時間を持ち、その内容を対象児別に経過が辿れるフォームで記録を続けている。

今後の計画内容：

検査、聞き取り、観察と記録を引き続き、実施していく。津守・稲毛式精神発達検査は0～3歳までは半年に1回、3歳以上は1年に1回実施する予定。S-M 社会生活能力検査も、1年に1回実施していく予定。自尊感情測定尺度は小学生を対象に実施していく予定で、対象児や実施時期について検討していく。

## 2. 言語獲得分野

研究概要：

こめっこに来ている子どもたちの手話言語力と日本語力を縦断的に評価し、その成長を追跡している。手話の文法力と語彙力を測るために「日本手話文法理解テスト」と「手話語彙流暢性検査」を、言語を使って他者と適切にやりとりする力を評価するために「質問応答関係検査」を、年に1回ずつ行っている。同時に、手話を獲得して育つ子どもたちの日本語力についても、文法力（J-COSS）や語彙力（絵画語彙発達検査）を用いて検証していく。

現在の進捗状況：

① 日本手話文法理解テスト（2024年度 目標数15名） 2025年3月31日時点

	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	合計
2024年度	0	4	3	4	0	1	1	0	2	15
2023年度	6	2	5	0	1	0	0	1	0	15
2022年度	4	4	0	2	1	2	3	0	0	16
2021年度	3	1	5	2	2	5	0	0	1	19
2020年度	0	5	0	2	8	0	0	0	0	15

※前年度に42点以上取った被験児は、実施していない。

② 手話版語い流暢性検査（2024年度 目標数8名） 2025年3月31日時点

	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	合計
2024年度	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
2023年度	0	1	1	0	0	0	0	2	0	4
2022年度	0	2	0	1	0	2	3	0	0	8
2021年度	0	0	0	0	1	1	0	0	0	2

※2021年度より実施



## ③ 質問—応答関係検査（2024 年度 目標数 15 名） 2025 年 3 月 31 日時点

	4 歳	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10 歳	11 歳	12 歳	合計
2024 年度	0	0	3	2	0	0	1	0	2	8
2023 年度	5	3	4	0	0	0	0	1	0	13
2022 年度	3	3	0	2	0	2	3	0	0	13
2021 年度	1	1	4	1	2	5	0	0	1	14
2020 年度	0	3	0	1	6	0	0	0	0	10

※前年度に 200 点以上取った被験児は実施していない。

## ④ J-cross 日本語理解テスト（2024 年度 目標数 8 名） 2025 年 3 月 31 日時点

	4 歳	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10 歳	11 歳	12 歳	合計
2024 年度	0	1	2	1	0	0	1	0	3	8
2023 年度	3	1	3	0	0	0	0	3	0	10
2022 年度	0	0	0	2	2	2	3	0	0	9

※2022 年度より実施

## ⑤ PVT-R 絵画語い発達検査（2024 年度 目標数 8 名） 2025 年 3 月 31 日時点

	4 歳	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10 歳	11 歳	12 歳	合計
2024 年度	0	1	2	1	0	0	1	0	3	8
2023 年度	3	1	3	0	0	0	0	3	0	10
2022 年度	0	0	0	2	2	2	3	0	0	9

※2022 年度より実施

今後の計画内容：

2025 年度に実施したデータと、これまでの結果を含めた発達的な変化等について分析をしていく。

## 3-1. 学習能力（理解力）分野

研究概要：

手話言語を獲得・習得して育つ子どもたちの理解力を明らかにするために、手話劇や手話モノログを題材にしたテストバッテリーを作成した。質問紙とインタビューを併用して実施し、記憶、知識、理解の発達的な変化を評価する。

現在の進捗状況：

こめっこ参加児（5 歳～11 歳）を対象に検査を実施し、手法の確立、評価方法など、メソッドの構築を進めている。



## ① 手話劇版「心の理論課題」 (2024 年度 目標数 8 名) 2025 年 3 月 31 日時点

	4 歳	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10 歳	11 歳	12 歳	合計
2024 年度	0	0	3	3	0	1	1	0	2	10
2023 年度	0	0	3	0	0	0	0	1	0	4

※2022 年度にパイロットテストを実施。2023 年度から本検査開始。

## ② 手話モノログ動画 (2024 年度 目標 8 名) 2025 年 3 月 31 日時点

	4 歳	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10 歳	11 歳	12 歳	合計
2024 年度	0	0	3	3	0	0	1	0	2	9
2023 年度	0	0	3	0	0	0	0	1	0	4

※2022 年度にパイロットテストを実施。2023 年度から本検査開始。

今後の計画内容：

こめっこ参加の年中～小学 5 年生を対象に検査を実施する。手法の確立、評価方法など、メソッドの構築とともに、結果を分析していく。

3-2. 学習能力（思考力）分野

研究概要：

手話を第一言語として概念獲得する環境にある子どもを対象に、言語理解に基づく概念や自然法則を 把握する力や、時間や空間の変化などを推論する力を調査することにより、手話で育つ子どもたちの評価法や教育環境の改善に繋げていく。就学前児や小学生を対象に、要素間の法則性や関係性の発見、数量感覚等の思考力を測る問題を作成し、言語を通してさらに複雑な概念を獲得し、そこから思考の深まりにつながっていくかについて、各個人の手話や日本語の獲得進度を指標として比較検討する。ろう児の思考力の正確な把握により、すべての教科の基礎となる学習能力を正しく評価することが初めて可能となる。

現在の進捗状況と今後の計画内容：

問題作成の指針をもとに全 45 問の思考問題を作成、マニュアルを作成し、脳科学領域のろう者とコーダの成人を対象として検査実施を行った。手話読み取り時の脳活動の計測と思考能力について比較分析し、学習能力・思考力の根底にある各過程が、物語の理解で必要とされる言語処理と共通することを着想した。現在はこの成果を学会発表し、また研究論文として投稿中である。次年度は、こめっこの子どもたちに対する検査を実施し、各過程間の相関などの分析を通して、言語と思考に関する考察を深める。

#### 4. 脳科学分野

##### 研究概要：

脳科学領域として、(1)手話読み取り時と、(2)思考力テストの解答時の脳活動の計測を実施し、両者の比較検討によって、言語野を中心とした脳機能の定量的な解析と手話での思考について分析する。また、学習能力（思考力）分野との比較により、手話で育つ子どもたちの学習能力の評価に役立つような評価を脳科学から行う。

##### 現在の進捗状況：

(1)手話読み取り時と、(2)思考力テストの解答時の脳活動を fMRI で計測し、その結果を活動部位ごとに詳細に分析した。その結果、言語野における手話読み取り時の脳活動と、思考問題の各項目を解く時の脳活動に共通したパターンを見出した。この成果をもとに学会発表や論文化を進めている。

##### 今後の計画内容：

2024 年度に進めた解析結果をもとに、学習能力領域と連携して、言語の獲得と思考の相関や、意味的理解に関する脳機能の分析と評価を進める。子どもたちが獲得した手話言語がどのように思考力と接続しているのかについて、言語と思考の基礎を明らかにする。また、「わかる」という体験自体がどのように子どもたちの学習を支えていくのか、こめっこ研究の全体の研究成果と合わせて総括すべく、成果の整理を進めていく。

## 思考力・学習能力研究プロジェクト会合 議事録 概要

2020 年度:1～6 回    2021 年度:7～13 回    2022 年度:14～19 回    2023 年度:20～24 回  
CANPAN にて各年度の概要を掲載。

### 2024 年度

	日程	概要
25	2024 年 6 月 27 日(木)	・全体の研究進捗報告 特に脳科学、学習能力(理解・思考)について
26	2024 年 7 月 6 日(土)	・全体の研究進捗報告 ・脳科学、学習能力(思考力)の結果について解説
27	2024 年 7 月 7 日(日)	・全体の研究進捗報告 ・2024 年度手話言語条例シンポジウム報告内容について検討 ・次年度以降の研究報告の方法について検討
28	2024 年 8 月 29 日(木)	・全体の研究の進捗報告 ・次年度以降の研究報告の方法について検討
29	2025 年 1 月 23 日(木)	・全体の研究の整理、進捗報告 ・2024 年度手話言語条例シンポジウムでの報告内容の確認

# 聴覚障害小学生を対象とした手話習得集中合宿の試み

○久保沢寛  
(NPO こめっこ)

KEY WORDS : 聴覚障害 手話言語習得 小学生

河崎佳子  
(神戸大学人間発達環境学研究科)

## 【目的】

大阪府手話言語条例に基づく施策として、2017 年6月より聴覚障害(ろう・難聴)未就学児とその家族を対象に、乳幼児期手話言語獲得支援事業「こめっこ」\*が実施されている。また、2020 年4月からは、「手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト」(日本財団助成事業)の一環として、小学生を対象とした手話言語習得支援「もあこめっこ」を実施してきた。そして、2023 年8月には、日本手話のスキルアップと、活動参加への意欲向上につながることをねらいとして、「手話習得集中合宿(以下、手話合宿とする)」を試みた。ここでは、その内容と成果、今後の展望について報告する。

## 【方法】

- (1)対象児:2017 年「こめっこ」開始当初から、継続して活動に参加している小5年生の聴覚障害児 4名(男女各2名。中等度難聴1名、高度難聴1名、重度難聴1名、いずれも補聴器装用。人工内耳装用の重度難聴1名。全員が聴覚口話法による日本語習得訓練の後、5歳で日本手話に出会った)。
- (2)期間:2023 年 8 月 21 日～24 日(3泊4日)
- (3)支援スタッフ:ろうスタッフ4名(内、日本手話母語者が1名、日本手話習得者が2名、対応手話使用者1名)、日本手話を習得している聴スタッフ1名(必要に応じて手話通訳を担当)。4日間の行動はすべて、ろうスタッフ主導で進化した。
- (4)プログラム:4日間の活動内容を、以下の表に示した。

表1 4日間のプログラム

	1日目	2日目	3日目	4日目
朝		スポーツ 全員で相談し、種目を決めて実施。都度、ルールや説明などを確実に理解して進める。	<手話企画> ディスカッション② 子どもペアで/スタッフを含むグループで	室内遊び
昼	オリエンテーション 施設職員の説明を手話通訳を介して理解する。	工芸体験 道具の使い方を学び、協力して作品を完成させる。	自炊体験② 飯盒炊爨 役割分担を決め、協力して、会話を楽しみながら体験	解散
夕	<手話企画> 「きゅっとものがたり」にチャレンジ	<手話企画> ディスカッション① スタッフとペアで	<手話企画> ショート手話劇伝言ゲーム	
夜	星空ウォッチング 手話通訳を介して、星座や天体観測器具の使用方法を学ぶ	自炊体験① パーベキュー 役割分担を決め、協力して、会話を楽しみながら体験。 花火	キャンプファイヤー 3日間の体験の振り返りと共有	

全ての活動は、手話母語者のろうスタッフの日本手話に触れる時間となっていたが、とりわけ日本手話の習得をねらいとして計画された活動(手話企画)は、次の3つである。

### ①「きゅっとものがたり」(物語の日本手話要約)にチャレンジ

日本手話ならではの表現、リズムで昔話や物語のエッセンスをまとめた手話要約を、練習し、覚えて披露する。子どもがチャレンジを拒む場合は、新米スタッフが子どもたちに代わってチャレンジャーとなり、子どもたちは観察を楽しむ形で参加する。

### ②ショート手話劇の伝言ゲーム

子ども同士でペアを作り、一方 A は手話劇を見ずに待機する。もう一方 B はろうスタッフのショート手話劇を見た後、待機していた A に劇の内容を手話で伝達する。その後、A は全員の前で理解した内容を手話で報告し、内容の正確さを競う。

### ③ディスカッション(テーマトーク)

テーマを決めて、ディスカッションを楽しむ。ろうスタッフと子どものペアトーク、子ども同士のペアトーク、ろうスタッフを交えたグルーブトーク、3つのパターンを準備、与えられたテーマにつ

いて、自分の考えを伝え、相手の考えをきき、さらにやりとりを深めていく。それぞれに話した内容は、最後に全員で共有する。

## 【結果と考察】

4日間のプログラムをほぼ順調に進めることができた。「星空ウォッチング」は曇天のため DVD 学習に切り替えられたものの、残念な思いを語り合いながら、楽しんで過ごした。

手話合宿を進めるに従い、子どもたちが手話で会話する時間が徐々に長くなり、手が自然に動くようになっていった。先述の「手話企画」も手ごたえがあった。すべてに手話があることで、理解や情報共有に要する時間が短縮され、タイムラグの少ない中で、スムーズに物事が進んでいった。スタッフが手話でやり取りする様子を観察することで、子どもたちが次の段取りを理解し、自発的に行動する場面も見られた。内容がわからずに戸惑う状況がないデフスペース(Deaf space)の保障は、子ども達にとっても、ろうスタッフにとっても、ストレスフリーに、プログラムの内容を心底楽しむ体験につながっていた。

自由時間にボードゲームなどをする際には、健聴者対象に考えられたルールに修正を加え、ろう児も難聴児も共に楽しめる工夫を、子どもたち自身が提案して進めていた。最終日の室内遊びの際は、子どもから「人狼ゲーム」という遊びの提案があり、ルールを知る子どもたちが、かなり複雑なルールを手話で説明し、スタッフを含め、全員で楽しむことができた。

後日、保護者に対し、子どもたちが合宿体験をどのように語っていたか、何か変化が見られたかを尋ねたところ、以下の回答を得た。

- ・「夏休みで一番楽しい体験だった」「まだまだ帰りたくなかった」と言っていた。
- ・通っている地域の小学校で体験した宿泊学習と比べて、手話合宿はどうであったかを聞くと、「楽しいに決まっている」と言い、その理由を、「誰にも気を使わず、気持ちが悪くならず、リラックスして過ごせるから」と語った。
- ・「居心地がよかった」と言っていた。
- ・「いろいろ知ったのでビックリした」と言っていた。
- ・合宿以前にはなかった手話表現をしていて、驚いた。
- ・合宿以前より、手がよく動き、手話表現が速くなっていた。

日本手話母語者を中心に手話が堪能なスタッフ、同年代の仲間と過ごすことによって、子どもたちは、自分らしく自然体で過ごせる快さと共に、自己効力感を味わえた印象を受ける。それは、きこえない(目で生きる)自分に関する自己認識やアイデンティティ形成にも役立つ経験だろう。対象児全員が、合宿後の活動にも、生き生きと積極的に参加している。

## 【展望】

今後は、幼児期から「こめっこ」に通っている小学生全学年に対象を広げて実施していきたい。その際に、低学年と高学年に分け、年齢や発達に合わせたプログラムを作成し、その効果を検討していく。

## 【文献】

河崎・物井・久保沢(2018)「手話言語のあふれる早期支援(1)」日本特殊教育学会第 56 回大会ポスター発表

\*NPO こめっこ HP: <https://www.comekko.com/>

(KUBOSAWA Yutaka, KAWASAKI Yoshiko)